

## 直視するリアリストたち(1)

——これは死んだ魚である——

物事を直視するとは、どういうことだろうか？

それは、何よりも手あかにまみれた常識から自由になり、対象の機能に即して物事を見ることであろう。自分の思い入れや、主観をできる限り排除して、対象を即物的に見ることである。

久方ぶりに会った友人と行った寿司屋で、大トロを前にして「これは死んだ魚である」と見る人はまずいない。床の間に飾られた鉄砲百合を見て美しいと思う人はいても、「この白い花は植物の生殖器である」と見る人はいない。

このような物の見方は、何の役にも立たない暇つぶしの考え、と非難されそうである。だが、わたしの経験からいえば、このような異質の視点は、物事を多面的に見るためにむしろ必要なことである。なぜなら、われわれの物の見方は、あまりに常識に害されており、対象の真の価値をしばしば見失っているからである（ちなみに、食卓に出された魚を見て、「死んだ魚」と観じたのは、マルクス・アウレリウス帝である。花を見て「植物の生殖器」とであると観じたのは、歌人で評論家の上田三四二である）。

受勲者にとって、勲章の主観的な価値は極めて大きいであろう。とはいっても、勲章自体の金銭的価値は二足三文だし、機能的には「権力者が権力装置を維持するための最も安上がりな手段」にすぎない。見方によっては「勲章は老人のおもちゃ」にすぎない。即物的に見た勲章の価値と、世間の常識との間にはかなりのギャップがあることになる。だから、ただ受勲をありがたがるのではなく、モンテーニュのようにサン・ミシェル首飾章を受けながらも、「世渡りのための虚しい必要悪」と見るぐらいの、醒めた眼がほしいものである。

直視思考は、一面的だとか、皮相的だとの謗りを甘受しなければならない。だが、物事には必ず二面がある。主観的にはおめでたいことでも、客観的には弊害をもたらすことも多い。主観的にどれほど純粋であろうと、結果的に他人に踊らされ操作される例は枚挙にいとまがない。

日本人は、ともすれば心情とか誠意とか素朴さといった主観的要素を重視しがちだが、こ

れはあまりにも幼児的な物の見方である。

### ——直視する哲人エピクテトス——

直視的思考をつきつめれば、ついには、中期ストア派の哲人エピクテトスのように、人生の秘密を呵責なく剥ぎ取ってしまうようになる。

かつて奴隷であったエピクテトスは、過酷な体験を経て、徹底した理知主義者となった。召使いがコップを割ったとき、それを怒ってはならない、と彼はいう。コップはいつか壊れるものであるからだ。同様のことは、妻子が死んだときにもあてはまる。

「妻子が永遠に生きることを願うのは愚か者だ」と彼はいう。

他人の妻子が死んだとき、君は「それは人間の運命だ」という。だが、自分の妻子が死んだときには君は泣き叫び、自分の不運を呪うのだ。だが、よくよく知ることがよい。失った妻子を求めるのは冬に無花果<sup>いちじく</sup>を求めるのと同様である。

さらに、エピクテトスは、生死の境目にあっても自分をあたかも他人のように見つめよ、という。航海の途中で暴風雨がやってきたとする。船が沈んでいく。この先どう対処したらよいだろうか。何もできないなら、あわてふためいてはならない。

航海に当たって乗客である私のできることは何か。船の出る日や時間を選ぶことである。だが、航海の途中で暴風雨がやって来たとする。そうすると、私は今さら何を心配すべきだろうか。私のすべき選択はすべてなしたのであり、暴風雨にどう対処するかは船の舵取りの問題だ。私には何もできることはない。

しかし船が沈んでいく。その場合、何をすることができるか。私は自分のできることだけをする。つまり、私は恐れず、泣かず、神を責めず、生けるものはすべて死ぬという万物の法則を知りながら溺れて死ぬだけである。

私は永遠なものではなく人間に過ぎず、時が来れば私は去らなければならない。そうなら溺れて去ろうと、病で去ろうと何の違いがあるだろうか。いずれにせよ、私はこの世から去っていかなければならない。

（訳は『キケロ エピクテトス マルクス・アウレリウス』世界の名著13 中央公論社を参考にした）。

もちろん、わたしも彼のいうことは頭の中ではわかる。だが、感覚的にはとてもエピクテトスのようには割り切れない。エピクテトスの思索は貴重でも、今の世にこれほど割り切ることのできる人は極めて稀であろう。

### ——直視する者は嫌われる——

われわれは、つねに自分の価値観によって物事を見ている。だが、直視するためには、手あかのついた価値観から自由にならなければならない。

道徳、権威、常識、建前を疑うことなしに、直視することはできない。既成の価値観を捨ててこそ、はじめて直視が可能となる。だから直視する者は伝統的考えに反することになる。多くの人から敬遠され、反発を受け、時に嫌われることになる。

直視する者が嫌われるのは、あまりにも過酷な人生の真実を呈示するからである。

人は誰でも体裁屋である。人は身も蓋もないリアリズムを嫌う。人は幻想と虚飾なしには生きられない。いや、幻想と虚飾こそは、人間の文化を生み出した母である。

勲章を喜ぶ人、名誉職を誇る人、ブランド品で身を飾る人、有名人との交際を自慢する人など、人は装飾物と虚飾によって精神の均衡を保っているところがある。それは、人の本性である。時には過酷な現実に見えつづいた方が、精神衛生にはよいであろう。

精神科医でガン患者だった頼藤和寛教授は、病人の見舞いと葬式の参列について、皮肉たっぷりに「災難みたいな風習」だと著書で述べている（『わたし、ガンですーある精神科医の耐病記』）。

教授は平成11年の晩夏にガンの初発症状を出し、翌12年の6月に直腸ガンで入院、手術を受けた。その後ガンは転移。その間の「耐病記」（闘病記ではない）を綴ったのが同書である。教授はこの本を出版する直前に53才で逝去された（同書には「人生は本当は希望なしでも可能である」というS・ブラックモアの言葉が引かれている）。

教授のように死と直面した者にとって、世間の常識や虚飾や幻想は何の意味も持たなかったであろう。

われわれは日頃道徳とか礼儀とか倫理とか常識とかいろいろな夾雑物によって害され、対象を直視することができない。だが、死に直面したとき、人は物事の究極的な意味や価値を明瞭に意識するようになる。死に直面した人にとって勲章は何の価値を持とうか。浮き世の義理で行く葬式も無駄な時間にすぎない。

見舞いの場合、手ぶらで行くわけにもいかないから花や果物などを持っていく。会葬の時は、喪服ないしそれに準ずる容儀を整え、しばしば香典のたぐいまで持参しなければならない。

見舞いでは、さも心配そうに、あるいは安心させるか元気づけるかするように振る舞わねばならず、会葬では、まことに愁傷な様子で悔やみを述べ、故人を偲び、かつ悼まねばならない。

しかし、これほど見舞い客や会葬者に努力と投資を強いるわりには、本物の病人や死者にとって実質的なメリットがほとんどないものも珍しい。一種の儀式だからしかたがないといえそうなのだが、見舞われた病人にあとで対応の疲れが出ることもある。死者が会葬者の多寡に一喜一憂したとは聞いたことがない。

見舞いも会葬も、ふつう浮き世の義理で「行かないわけにもいかない」からか、病状への好奇心や斥候役のための見舞い、ないし不時に旧知が集まる好機として参列する葬儀といった不純な動機が混入してしまう。

このように考えてくると、さまざまな社会的拘束を外してみれば、見舞いや会葬など多くの人が行きたがっておらず、また来てほしがってもしないという骨格が透視されてくる。まして真夏の炎天下や厳冬の風の日など、行くのも億劫、来てもらうのも恐縮で、誰にとっても災難みたいな風習である（傍点筆者）。

会葬者数千人の盛大な葬式などは、死者を弔うというより後継者の権威づけのために行われるのが実情である。個人の遺徳を忍んで銅像を建てるのも、その動機は純粋なものとはいえない。なぜなら、まさに銅像を建てることを提唱した人が、故人のことなどすぐに忘れ去ってしまうものだからである。望むらくは、死者は生者を走らすべきではない。

### ——七首は隠し持て——

物事を直視するにはある種の心構えが必要である。

最も大切なのは、世間の常識を疑うことである。常識というものは、時に行き過ぎた考えや偏見を正す作用があるが、同時に、しばしば手垢のついた俗論にすぎないことが多い。常識をつねに疑い、自分で考える習慣を育てることが直視するには大切なことである。

では具体的にはどうすればよいだろうか？

第1に、相手方の善意や悪意などの主観的意図は無視し、外形的な行為やそれがどのような具体的結果をもたらすかを考えること。

第2に、世間的な分別を脇に置き、対象の機能のみを見ること。そして対象の価値を、たとえば金銭的価値に換算するなどして、数量化してみること。

第3に、言葉より結果を重視すること。形式より実質を重視すること。装飾より機能を重視すること。

直視することは、なかなか難しいが、その効用は、極めて大きいものがある。

人生には危機がつきものである。受け入れがたい突然の危機に直面したとき、われわれは無力で茫然自失してしまう。人は誰しも、厳しい現実と真正面から向き合うことを嫌う。激しい現実を避け、及び腰になり、逃げようとするのは人間の本性である。

だが、日頃から物事を直視する目を培っていれば、危機の意味や幻想度を正確に見ることができるので、危機に上手く対処することができる。直視的思考は非常時に最も力を発揮する。日々の生活、人間関係、ビジネス、そして生き方まで、様々な分野で直視思考が役に立つ。

ただし、直視思考は、物事の一面の真実を穿つにすぎないことも、知っておくべきであろう。直視思考も多様なものの見方のひとつにすぎないのであって、唯一絶対の思考ではなく、相対的価値をもつにすぎない。

直視思考は、物事の真実を暴くには極めて優れているが、しばしば世間に誤解され、世間の反発を招く。

直視思考は、懷に隠した<sup>あいくち</sup>匕首のようなものであって、滅多に人に語ってはならない。あからさまに語れば、あなたが嫌われることは確実である。

受賞パーティーで恩師が喜んでいるのに、わざわざ水をさすようなことをいうのは愚かである。知人が業界の名誉職について舞い上がっているときは、素直に誉めておけばよい。

匕首は懷深く隠し持ち、場所と時と状況に応じて用いることが必須である。

もちろん直視思考を貫くのも大切だが、モンテーニュのように、常識や俗論のいかがわしさを知りつつも、受勲するやり方もアリだろう。

「直視思考は心の内に深く抱いて、いざというときだけに使う」心構えがないと、時にあなたに災害をもたらす。ご用心のほど。